

大学等の設置の趣旨及び特に設置を必要とする理由

○心理臨床学科及び人間文化学科設置の理由

1. 心理臨床学科及び人間文化学科設置の趣旨

1) 学園の沿革

学校法人志學館学園（旧実践学園）は、明治 40 (1907)年、鹿児島県女子教育の先覚者満田ユイが鹿児島技芸講習所を創設したことに始まる。その後、次のような取組みを経て今日に至っている。

- (1) 現在の鹿児島学芸高等学校に至るまで、専門職業教育を中心とした女子後期中等教育を行ってきた。
- (2) 昭和 40 (1965)年、鹿児島女子短期大学を開設し、女子の高等教育を展開した。
- (3) 昭和 54 (1979)年、鹿児島女子大学を開設し、女子高等教育の充実を図った。
- (4) 昭和 62(1987)年、中・高 6 年一貫教育を行う志學館を開設し、女子教育専一という伝統の枠を超えて男女共学の学園に踏み出した。
- (5) 平成 11 (1999)年、鹿児島女子大学に法学部を開設するとともに、男女共学とし、校名を志學館大学と改称した。同時に学園名も志學館学園と改称した。

本学園は 95 年に及ぶその歴史の中で、75,000 人に上る卒業生を社会に送り出し、地域の発展と振興に貢献して今日に至っている。その間一貫して、女子の社会的地位の向上を目指して教育活動を展開してきたが、法学部の創設を機に共学化に踏み切り、時代に即応した堅実にして有為な人間の育成に努めてきた。

2) 心理臨床学科及び人間文化学科設置構想

(1) これからの社会と大学教育

人間の叡智の成果である科学技術の進歩は、今日もはや人間が容易に制御することのできない巨大な機械文明を生み出し、その結果、地球上の生命体の生存環境そのものが破壊されかねない危機的状況が現出している。我々は、古い伝統的な思考の枠組みをもっては解決できない諸課題に直面しているのである。今までの日本では、西洋先進諸国の経験や知識を学び取ることが近代化と考えられ、それこそが幸福への道であると了解されたため、画一的な詰め込み教育が最も効率的に機能した。しかしその結果は、学校教育の場においても社会生活における個々人の行動様式の面でも、様々な弊害が生じている。豊か

さの極にありながら、日本人の多くはより良く生きる目標を喪失し、混迷の中に落ち込んだまま身動きのできない状況下にあるように見受けられる。

過去 130 年間、日本人は夜を日に継ぎ、寝食を忘れるほどに西洋文明の摂取に努めた結果、経済的・技術的に日本は西洋先進諸国に比肩しうる力と富を獲得した。しかしながら、物質的な豊かさは必ずしも心の満足を充足することにはならず、現実の我が国社会では日々、人間の尊厳を微塵も感じさせない信じ難い出来事が生起している。

しかし世界は、政治・経済・文化を問わず人間活動のあらゆる面において、人類史上、火の使用と農業文明の誕生に匹敵するほどの歴史的な構造変化を経験しつつある。こうした流動的で複雑な時代にあっては、過去の経験則や既成の知識では、激変する世界の多様な諸課題に適切に対応し得ない。問題の所在を自ら考え、自らの努力で目標を設定し、問題の解決を図る努力とその能力、いわゆる課題解決能力が重要視され要求される理由がここにある。

従ってこれからの大学教育は、個性的で創造的な思考力と判断力を育成することが強く求められるのである。加えて、大学全入時代を迎えようとしている今日、大学教育は理念の上でも方法の上でもこれまでとは異なる大衆型の新たな方向が求められ、多彩な資質、能力差を有する学生に対し、それぞれの大学が独自の理念と明確な教育計画のもとに教育を行い、彼らを社会に必要な人材として養成することがますます重要になっている。

このような観点に立つとき、不確実で不安な現代を生きる者にとって、今一度ヒューマニズムの本義に立ち返って真剣に人間の本性を探求し、自己を明確に認識し、先人の築き上げた偉大な文化に学びつつ人間精神の涵養のための方途を模索することは計り知れないほど重要な作業である。物質的な豊かさの中に精神的な豊かさを実現してこそ、完成された社会となるであろう。そのような社会を目指して、これからの大学教育は、個としての人間の研究に止まらず、人間と人間の関係、人間と社会の関係の研究をこれまで以上に強く指向する必要がある。

(2) 地域社会の状況

鹿児島県は、工業を中心とした生産活動拠点から遠く隔たっているところから、生産年齢人口の県外流出に伴う生産性の低迷、従って県民所得の低迷という状況から永らく抜け出すことができない。そのため全体的に活力に欠ける嫌いがある。元来、鹿児島県は歴史的にも青少年の教育に並々ならぬ力を注いできた土地柄ではあるが、地元で優れた教育研究機関が少ないこともあって、勢い、有能な人材は首都圏をはじめとして県外を志向する傾向が顕著である。以下に、鹿児島県の具体的状況を挙げる。

①鹿児島県内の高校を卒業して大学に進学する者のうち、県外大学進学者は県内大学進学者の 1.5 倍に達している。しかも、彼らの多くは再び県内に戻ることはない。従って、鹿児島県の若年層の流出はますます促進され、生産年齢人口の割合は全国で下から二番目である。その結果、県民個人所得も全国最下位ないしそれに近い状況が長く続いている。

若年層の確保は、本県生産性と所得水準の向上、県民生活の活性化の観点から地域にとって重要な政策課題となっている。

②鹿児島県内の大学と短期大学を合わせた高等教育機関への進学者は全体では増加しているが、その内容を見れば、短大進学者数が減少し、それ以上に大学進学者数が増加している。本県では、①に見る如く、県民所得の低さ故に、他県に比べて女子の短大志向が根強く見られたが、しかし近年いわゆる四大志向が本県においても確実に進行しつつある。それは、とりもなおさず時代の要請であって、男女を問わず、豊かな知性と鋭い感性を兼ね備えた人材が求められていることを意味している。また、本県の高校卒業者の大学進学率は37%程度で、全国平均からすれば非常に低く、経済情勢の好転、女子の四年制大学進学率の向上とともに今後の大幅な伸びが期待される場所である（数字は「学校基本調査速報」による）。

③現在、様々な職場で心理学的知見が求められているが、鹿児島県内の臨床心理士は、平成14(2002)年4月現在42人であり、その大多数は鹿児島市に在住している。特に、北薩、大隅、離島方面では臨床心理士が皆無の市町村も多く、本学の所在地である隼人町に隣接する国分市（人口：53000人）にもいない状況である。文部科学省は、平成17(2005)年度までにすべての中学校にスクールカウンセラーの配置を目指しているが、鹿児島県におけるスクールカウンセラーの大半は本務との兼務であって、人数の点でも業務内容の上でも甚だ心もとない実情である。なお、平成13(2001)年度臨床心理士資格審査合格者は、全国で887人であったが、鹿児島県は僅かに7人であった（臨床心理士に関する数字は「(財)日本臨床心理士資格認定協会」による）。これは明らかに、近隣県を含めた南九州地域に臨床心理士を養成する機関がないことによるものである。

2. 特に心理臨床学科及び人間文化学科を必要とする理由

1) 心理臨床学科設置の必要性

日本では今日、「癒しブーム」とか「ヒーリング」といった表現が流行語になるほど、特に若い世代の間に精神的な不安感・疲労感が広がっているように見受けられる。およそ常識をもってしては考えられない殺伐な事件が日常化しつつある現実を見ると、我々は改めて感性豊かな人間教育の重要性を思わざるを得ない。近代合理主義精神のもとで培われた価値観や規範によっては律することのできない領域が人間精神に内在する事実、しかもそれが想像以上に人間の行動を規定している事実を我々は知っている。ところが、これまで心の問題は専ら精神神経科の領分として特殊視されてきた。人間関係を巡る様々な軋轢は、人間が社会生活を営む以上不可避ではあるが、しかし現今のように複雑で不安定な社会にあっては、あらゆる組織の中で何人に対してもそれは生じ得る現象であり、学校や家庭においてすらその例外ではない。現に医療・福祉・教育・司法・企業等様々な分野において、心理学的知見とりわけ汎用性のある臨床心理学的素養を持って、心の問題の解決に迫り得

る人材の養成が急務とされている。

例えば、児童養護施設や障害者施設では、単に生活指導という面だけでなく、心理面での援助が必要である。高齢者施設では、介護技術はもとより、加齢による心理的変容を理解して個々に関わることが求められる。さらに病院では、患者個人に対する援助に止まらず、家族への支援も重要である。既に社会問題と化した感すらある学校教育の場におけるいじめや不登校、凶悪化する青少年の非行、あるいは家庭内暴力等々の問題に取り組む際には、心理学と教育学の連携による臨床活動が不可欠である。

本学文学部人間関係学科は、心理学・社会学・教育学（平成 12(2000)年度より学校臨床学）の3専攻体制のもとで人間関係の教育・研究を行い、優秀な人材を社会に送り出してきたが、上記のように、今日ではますます臨床の側面を重視せざるを得ない現実がある。そこでこの際、心理学専攻と学校臨床学専攻を統合して「**心理臨床学科**」とし、心理学・教育学の専門知識を有し、なおかつカウンセリング・マインドを具えた人材を育成することは、社会の現実的要請に直接応える道であると考えられる。

2) 人間文化学科設置の必要性

今日の我が国社会は国際化、情報化、少子高齢化の進展が加速し、人間生活のあらゆる局面が急激に変化しつつある。

国際化の進行に伴い、外国語（とりわけ英語）の実践的な運用能力と外国人に対する日本語教授能力の必要性が飛躍的に高まっている。しかしまた同時に、冷静な自己認識があってこそ正しい他者認識も可能になるのであって、真の国際理解、異文化理解のためには何よりもまず歴史や文学をはじめとする我が国の伝統的文化に対する深い洞察力とその継承・発展能力は、これまでも増して重視されなければならない。

情報化の進展は人間生活に革命的とも言える変革をもたらしつつあるが、しかし反面、それは人間の視野の限界を破壊し、我々は今日善きにつけ悪きにつけ、ありとあらゆる情報の洪水に飲み込まれている。従って、我々にとって何よりも必要なことは、与えられる膨大な情報を的確に取捨選択し利用することである。自覚的な判断能力が求められる所以である。

予想を遥かに超える少子高齢化の進展は、福祉・医療制度をはじめとしてわが国の社会構造を根底から変革しつつあるが、とりわけ教育面において深刻な課題を提起している。教育問題は、今日における最大の社会的・文化的問題となった感すらある。これを解決する一つの方向が生涯教育である。

迫り来るこれらの諸課題に柔軟な発想をもって真摯に対応するためには、従来型の個別の知識よりも、人文科学と社会科学を融合させた新しい体系のもとで、総合的・多面的な思考能力を鍛錬することが必要である。このため、本学文学部の国文学科と英語英文学科を統合し、さらに人間関係学科の社会学専攻を加えて「**人間文化学科**」を組織し、人間と、人間の営為の所産である文化を新しい視点から研究することが社会的要請に適う道であると

判断した。

3) 心理臨床学科及び人間文化学科の設置に伴う学部の名称変更

上記の如く、今回、「心理臨床学科」と「人間文化学科」の設置を申請する次第であるが、合わせて、これを機に学部の名称を変更したい。即ち、現行の文学部（国文学科・英語英文学科・人間関係学科）を改組して、新たに**心理臨床学科**と**人間文化学科**を組織することに伴い、「文学部」を「**人間関係学部**」と名称変更しようとするものである。「文学部」は伝統ある学部名ではあるが、既成のイメージと新しい2学科で構成する学部の内容とは必ずしも合致しないので、むしろ2学科の内容を包含し、しかも学科名として長年親しまれてきた名称を生かして、「**人間関係学部**」と改称するほうが適切であると考ええる。

4) 九州管内及び鹿児島県に設置される心理臨床学科及び人間文化学科並びにそれらに関連する学部・学科の状況

心理臨床学科を置く大学は、九州管内には1校も存在しない。心理学を中心とする学科について見れば、人間心理学科が長崎県に1校（長崎純心大学人文学部、入学定員80人）、心理社会学科が福岡県に1校（九州女子大学文学部、入学定員95人）存在するのみである。また心理学を含む学科としては、人間関係学科4校、人間科学科2校、人間発達学科1校が存在するが、南九州地域には皆無である。

人間文化学科を有する大学としては、九州管内に2校（九州女子大学文学部、入学定員80人、鹿児島国際大学国際文化学部、入学定員140人）が存在する。また「人間」や「文化」を冠した学科は幾つか存在するが、もとより、それらは教育内容や人材育成の面で同一ではなく、我々が構想する人文科学と社会科学を融合した「人間文化学」という新しい研究領域の開拓とは多分に異なっている。

なお、平成14年度において九州管内の大学数は74校に上るが、そのうちの33校(45%)は福岡県に集中していて、地域的に著しい偏りが見られる。また、人間や文化の研究を中心とする人文系学部としては、文学部13校、人文学部6校、人間環境学部2校、人間社会学部2校のほか、人間関係学部、人間社会福祉学部、人間発達学部、国際人間学部、国際文化学部、比較文化学部がそれぞれ1校ずつ存在する。しかしこれらの85%は、福岡県をはじめとして北部九州地域に集中している。

これからの社会において間違いなく重要性を増すと思われるカウンセリング・マインドを持った人材の養成、並びに確かな知識と豊かな感性を持って国際人として活躍することのできる人材の養成を目指す**心理臨床学科**と**人間文化学科**の設置は、教育の機会均等を確保し就学の機会を広げる上でも、鹿児島県のみならず、この分野の学科が存在しないか、もしくは稀少な南九州地域の受験生を裨益するものとなろう。(学部・学科名、入学定員等は、『平成13年度全国大学一覧』による。)

3. 取扱方針該当項目

今回設置を申請する**心理臨床学科**及び**人間文化学科**は、志學館大学文学部の学科を、入学定員の変更を伴うことなく改組することによるものである。

従って、「平成十二年度以降の大学設置に関する審査の取扱方針」に掲げる諸項目のうち、「二 具体的な取扱」「1 一般地域の取扱」「(2) 改組転換等」「① 入学定員の増を伴わない改組転換または同一設置者の大学及び短期大学の範囲内の入学定員の振替」に該当すると考えられる。

4. 人間関係学部でどのような人材を養成するのか

本学部で養成しようとする人材は以下の通りである。

1) 臨床心理士を含む心理学関係分野での専門家（心理臨床家）に将来なりうる人材（主に「心理臨床学科・心理学コース」で養成）

世界はいま、人口爆発、食糧不足、資源枯渇、エネルギー危機、環境汚染など地球規模の諸問題に直面し、身近なレベルでは、家族崩壊、学校荒廃、コミュニティの消滅など、人間関係の希薄化と人間精神の機械化・砂漠化が進行している。これらを背景として児童虐待、いじめ、非行、不登校、家族関係や職場、あるいは近隣の対人関係のストレスによる心身の不安と緊張、神経症レベル、境界例、うつ病などの精神疾患など、現代社会はさまざまな多層レベルの心理・社会的問題を抱えている。このような状況下で臨床心理士を始めとする心の専門家の需要はますます増大すると思われる。20年以上にわたる伝統をもつ本学の人間関係学科心理学専攻を母胎として新設される**心理臨床学科**は、心理学、臨床心理学の知識、技能の基礎を与え、将来その道の専門家になることが可能な人材を育成することを目標とする。

2) カウンセリング・マインドを持った教員、医療・福祉・司法等の部門に携わる職業人、一般企業の就業者、家庭で子育てに従事する者（主に「心理臨床学科・心理学コース、学校臨床コース」で養成）

心理学、臨床心理学の知識、技能、特にカウンセリングの知識、技能は、1) で示した専門家以外にも、上記のような複雑な社会において教育にたずさわる教員、医療・福祉・司法等の部門等に携わる職業人、一般企業への就職者、家庭での子育てを行う男女にとってもきわめて貴重なものである。**心理臨床学科**はこのような人々の中にカウンセリング・マインドを涵養し、それぞれの職務、仕事に大いに貢献することを目標とする。

3) 教育の主たる場である学校のかかえる問題を心理的側面を含む総合的見地から考えることのできる専門家、教員（主に「心理臨床学科・学校臨床コース」で養成）

本学が長年にわたって培ってきた心理学と教育学の教育課程を統合して、2年前に「学校臨床学専攻」が設置された。**心理臨床学科・学校臨床コース**はこの「学校臨床学専攻」、を基に今回新設されるものであるが、児童生徒や家族の個別的なカウンセリングだけでなく、学校組織や学校を取り巻く地域社会へのコンサルテーションなども行える幅広い実践力をもった人材を育成することを目標とする。

4) **スペシャリストかつゼネラリストとして社会で活躍できる人材（主に「人間文化学科」で養成）**

極度に社会分化が進んだ今日の複雑な社会においては、社会の全体像を把握することは誰にとっても困難である。またそれゆえに人間にとって基本となるべき文化の基盤をどこに求めるかについても見解の一致をみることがない。現代における文化の混迷の一因はここにある。このような状況において新設される「**人間文化学科**」は、(1) 英語、日本語、国文学の各分野の教育・研究の統合的性格、(2) 人文科学と社会科学の融合、(3) 学際的性格を持つ「生涯教育」の充実（この3点は以下に詳説される）を3つの基本理念として有する学科であるが、「統合的性格」「融合」「学際的性格」といったキーワードが示すごとく、現代社会での新しい総合的学問への志向を内包している。このような本学科では従来の専門的知識とともに新しい学問の総合性（ゼネラリティ）を獲得することができる。このことでスペシャリストであり、かつゼネラリストである人材が養成されるのである。

5. 人間関係学部学科等の特色

1) **心理臨床学科の特色**

近年、現代社会の有り様を反映して、臨床心理士やスクールカウンセラー志望の入学者が全国的に急増しており、本学もその例外ではない。本学は伝統的に心理学系を大きな柱として教育体制を整備してきたところであるが、今日の時代のニーズに応じてなお一層教育課程を充実・発展させるべく**心理臨床学科**として独立させ、それに**心理学と学校臨床学の2コース**を設けた。心理臨床学科は、その学科名が示すとおり、現実生きる人の「心と行動の諸問題」と直接取り組む臨床心理学と学校臨床学を中心に、広く心理学、教育学、臨床人間学あるいは福祉系、医療系なども取り入れた広い意味での臨床系の総合学科である。

2つのコースは心理学実験や心理アセスメント、心理測定法などかなりの授業科目が共通して重なる部分が多いのであるが、**心理学コース**では、心理学の哲学的背景から基礎・臨床分野を網羅し、心のしくみや働きあるいは人間行動を科学的にとらえる目を養うと同時に、臨床心理学の基礎を身につけさせることを目指す。今日、医療の領域、福祉の領域、教育の領域、司法の領域、産業の領域等、臨床心理学が社会に貢献する分野は非常に多様になってきているが、本コースではいずれの分野でも活躍できる汎用性のある臨床心理学的素養を持つ人材を育てる教育をおこなう。心理系の教員は現在9人配置されており、そ

のうち4人が臨床心理学を専門にしている。これは南九州随一の陣容を誇るものであり、学生の要望に十分応えるだけの個別的な教育課程を編成することができる。

一方、**学校臨床学コース**は、本学が長年にわたって培ってきた心理学と教育学の教育課程を統合して、児童生徒や家族の個別的なカウンセリングだけでなく、学校組織や学校を取り巻く地域社会へのコンサルテーションなども行える幅広い実践力をもった人材の養成を目指すものである。今日、学校現場では、不登校児童生徒の増加、いじめや自殺の多発、高校中途退学者の増加、あるいは少年の凶悪な犯罪や特異な事件の発生など、深刻な問題に悩まされており、教育相談や児童生徒指導の力量のある教員の養成が急務である。鹿児島県でもスクールカウンセラーや心の教室相談員の派遣などの事業が実施されているが、それに対処するための臨床心理学の専門的知識やカウンセリング技法を習得した人材が極端に不足している現状である。**学校臨床学コース**はこのような社会の要請に応えるために設置されたものである。

また、**心理臨床学科**では両コースとも臨床心理士養成のための大学院、あるいは心理・教育系の大学院進学を希望する学生が多いと考えられる。そのような学生に対しては、外国語教育を重視し大学院進学を視野に入れた教育を、医療・福祉・教育の現場に就職希望の学生に対しては、演習や実習を通して実践力を身に付けることができるような教育を展開して行く予定である。

なお、本学には心理相談室と学生相談室の2つの相談機関があり、それらを中心に各種の研究会を開催しているので、心理臨床学科の学生も豊富な臨床経験を積むことができる。

2) 人間文化学科の特色

本学科は「**国文学コース**」「**英語・英米文化コース**」「**日本語教育コース**」「**社会学コース**」「**生涯教育コース**」「**歴史・地理コース**」という一見関連のなさそうなコースが並んでいるが、実際には以下の3つの理念のもとに統合されたコース編成を持つ学科である。

(1) 英語、日本語、国文学の各分野における教育・研究の統合的性格

今日の国際社会において公用語としてもっとも重要な位置を占めているのはいうまでもなく英語である。しかし、日本人が「道具としての英語」を真に使いこなし、外国人との間で文化情報が伝達できるためには、国語・国文学と日本文化・歴史に関する知識と深く深い異文化理解が不可欠である。また、今日の国際社会において、日本語教育は、日本の文化的・経済的貢献を可能ならしめる基盤として、その持つ重要性はいよいよ高まるばかりであるが、ここにも優れた日本語教育能力の基盤に、「国語・国文学と日本文化・歴史に関する知識と深く広い異文化理解」が必要であることは間違いがない。国語・国文学、英語・英文学、日本語教育学のそれぞれの20年以上におよぶ本格的な教育と研究の伝統のもとに生まれ変わる本学科は、上記の課題をよく果たしうる基盤を有するものであるが、さらに歴史・地理、社会学分野を含み入れることで、その教育・研究能力を一層高めたといえる。このように本学科は、英語、日本語、国文学の各分野における教育・研究の統合的

性格を特色として有するのである。

(2) 人文科学と社会科学の融合

現今の複雑で不安定な社会において人間の生き方を深く考察するためには、従来の人文科学、社会科学といった学問分野の区分に基づいた知識の習得では十分といえない。たとえば、人間の理解にはその民族の心（民族性）の微妙な襞にまで入り込んで記述された文学作品の研究が不可欠であるが、その研究は他民族の文学との比較、自国の歴史についての理解、さらに、現代社会についての社会科学的な知識などの上にとってより十全なものになる。一方、社会科学は個々の具体的な人間についてのしなやかな感受性のもとで研究されて初めて人間生活の実態にそったものになるが、文学研究はその感受性を育てるには是非とも必要である。文学、言語、社会学、歴史学、教育学の分野を含む本学科は以上のような課題をよく果たすものである。このように本学科は人文科学と社会科学の融合的性格を持つという特色を有するのである。

(3) 学際的性格を持つ「生涯教育」の充実

今日における最大の社会的・文化的問題のひとつが教育問題である。この問題の解決の一方が「生涯教育」にあることは間違いないが、学校外の教育を扱うがゆえに「生涯教育」は実はきわめて多様な学問分野と学際的な関係を持っている。「生涯教育コース」が本学科に置かれている理由はそこにある。このように同コースは本学科内でより充実した教育・研究が可能であると同時に、その存在は**心理臨床学科**の**学校臨床学コース**との関係を保ちつつ本学科の特色を形成しているのである。

本学科は以上のような新しい理念にそって組み立てられたものであるが、修学の動機、目的、将来の進路等における今日の学生の志向はきわめて多様である点を考慮すれば、本学科のあり方は学生のニーズにもよく適うものであることを付言しておく。

6. 教育課程の編成の考え方及び特色

1) 共通教育科目

現代における諸問題に対して総合的に対処しうる深く広い視野をもった社会人を育成するために、学際的な教養教育を目指して、次のような4領域の共通教育科目群を開設する。

(1) 「**思想と文化の諸相**」は長いタイム・スパンで人間文化を眺めるため、この分野には、その基礎知識と思える哲学、思想、歴史、言語、文学、芸術等の人文科学系の科目が含まれている。

(2) 「**人間と社会の諸相**」は、近・現代社会とそこに生きる人間に関する知識を与えるものである。その一つは、現代社会において新しい勢力として現れつつあるアジアに関する科目群であり、もう一つは、現代の社会、文化環境の変化に伴って現れてきた女性、高齢者、障害者、開発などに関する科目群である。この分野には、法学、経済学、政治学、社会学、教育学等に属する社会科学系の科目が含まれている。

(3) 「**生命と環境の諸相**」は生命と環境に関する知識を与えようとする分野である。この分野には、従来の学問区分では数学、統計学、生物学、心理学、地理学等の自然科学系の科目が含まれており、また「生と死」という今日的授業科目を開設して、文化人類学的、社会福祉的、かつ医学的アプローチによるいわば一種の総合講義的教育を行うことも特色の一つである。

(4) 「**情報環境の諸相**」は独立した分野としていわゆる情報革命に対応できるようコンピュータに関する知識とその使用法を学び、「インターネット演習」、「文書と数値の処理」、「情報整理学演習」が演習科目として設置され、**特に「インターネット演習」は全学生の必修科目とする。**

(5) 外国語教育については、現在の国際語としての英語を最低1年間は学ぶ。また、ドイツ語・フランス語の他、中国語・朝鮮語を学ぶことで、アジアの時代にも対応できるようになっている。

2) 専門教育科目・心理臨床学科

(1) 卒業要件としては、共通教育科目から44単位以上、専門教育科目から80単位以上であるが、80単位の内訳は、学科共通科目から必修12単位を含め26単位、コース科目から28単位以上、心理臨床学科科目のうちから10単位以上、残り16単位は心理臨床学科科目、他学科及び他学部並びに協定に基づく他の大学等の授業科目から修得することとなっている。

(2) 現実に生きる人間の「心と行動の諸問題」を実践的に解決していくことのできる能力の育成を目指す心理臨床学科においては、専門教育の基盤形成をはかるために学科共通科目群を設けている。すなわち、「臨床人間学」や哲学・倫理学などの科目群によって人間の本質と人と人との関わりのあり方を問い、社会学・政治学などの社会科学の科目群や生涯学習・福祉・医療などの科目群によって現代社会の構造と社会のあり方を考察するとともに、現代における心理臨床のあり方を学んでいく。

(3) また学科共通科目群には、「心理学コース」と「学校臨床学コース」における専門教育の方法論的基礎を形成するための「心理学実験」「心理検査法」「心理学測定法」などの科目群が配置されている。

(4) 「**心理学コース**」においては、これらの基礎教育の基盤の上に専門教育を施すため、人間の学習・発達・行動などを科学的に解明する基礎理論研究の専門科目群と、実際の心の問題を解明し解決する方法を学ぶ臨床心理学の専門科目群が配置されている。

(5) 「**学校臨床学コース**」においては、教育の本質論・家庭や地域の教育論・学校教育の方法論などを内容とする教育学諸科目群、また教育心理学や社会心理学などの心理学諸科目群、そして学校カウンセリング演習・野外体験実習などによって構成される学校臨床学の専門科目群が配置されている。

3) 専門教育科目・人間文化学科

卒業の要件としては、心理臨床学科と同じく、共通教育科目から 44 単位以上、専門教育科目から 80 単位以上であるが、専門教育科目 80 単位以上の内訳は、基礎科目から 10 単位以上、卒業科目を 8 単位、コース科目から 30 単位以上(日本語教育コースは 23 単位)、人間文化学科科目から 16 単位以上(日本語教育コースは 23 単位以上)、残りの 16 単位は人間文化学科、他学科及び他学部並びに協定に基づく他の大学等の授業科目から修得することとなっている。

人間文化学科は、個別の専門的知識を習得するとともに、総合的な見地に立って、人間と人間の営為の所産である文化を研究することを目指している。具体的には、「国文学」「英語英米文化」「日本語教育」「社会学」「生涯教育」「歴史・地理」の 6 コースが設定される。これらのほとんどは、本来、伝統的な体系を有する学問領域であるが、感性豊かな人間教育を目標に掲げる本学科では、これらの体系の設定を必要最小限に止め、より広い総合を志向することこそ、今日の学部(学士)教育に相応しいと考える。勿論、それは専門性を捨象することでは決してない。履修上、学生の自由選択の割合を多くしているが、学生が専門性を追求することを妨げるものではない。

7. 教育方法及び履修指導方法

1) 共通教育科目

教養科目は、第 1 群から 6 単位、第 2 群から 6 単位、第 3 群から 6 単位、第 4 群から 4 単位を含め合計 32 単位以上を教養科目の中から修得させるものとする。受講の機会を多く与える配慮からセメスター制を採用し、全て 2 単位科目として、幅広く多数の科目を学ばせる。

また外国語科目は、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語の各外国語についてそれぞれⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの 4 科目(いずれも 2 単位科目)を開講し、2 か国語 12 単位以上を修得させる。ただし「英語Ⅰ」および「英語Ⅱ」は必修とし、2 か国語のうち 1 か国語については 8 単位を修得させるものとする。

2) 心理臨床学科の専門教育科目

(1) 1 年次に学科共通科目である「入門演習Ⅰ」(1 単位)、「入門演習Ⅱ」(1 単位)を必修科目として課し、大学における研究能力の基礎を形成する。すなわち読解力、文章作成力(レポート・論文の書き方など)、自己表現力、ディベート力などの養成を目指す。

この他、学科共通科目の履修は、1 年次および 2 年次前期において、心理臨床学研究の哲学的基盤を提供する「臨床人間学」(2 単位)、また両コースの概論的科目である「心理学概論」「学習心理学Ⅰ」、「学校臨床論」「教育学概論」(各 2 単位)を履修し、2 年次後期のコース選択に備える。そして 2 年次後期から 3 年次前期にかけて、両コースでの専門教

育の方法論的基盤を形成するための「心理学実験Ⅰ」「心理学実験Ⅱ」「心理検査法Ⅰ」「心理検査法Ⅱ」「心理学測定法」「心理学研究法」(各2単位)を履修する。

さらに哲学・倫理学、社会学・政治学、生涯学習・福祉・人権・医療などの領域をカバーするその他の学科共通科目群を、4年間を通じて選択履修することによって、現代における心理臨床の課題とそのあり方を学ぶ。

(2)「**心理学コース**」においては、2年次で学習心理学・発達心理学・臨床心理学・家族心理学等の諸科目を履修し心理学研究の基礎論を学び、3年次には心理学特講や様々な領域の演習科目を履修する。

そして、3年次後期からの「心理学特殊研究Ⅰ」「心理学特殊研究Ⅱ」「心理学特殊研究Ⅲ」(各2単位)によって卒業論文指導を受け、「卒業論文」(4単位)を作成しなければならない。

(3)「**学校臨床学コース**」においては、2年次では学科共通科目の心理学実験・検査法・測定法などの履修と並行しつつ教育学基礎論の諸科目を履修し、学校教育の本質とその背景にある関連領域の諸理論を学ぶ。3年次には心理学基礎論の諸科目と教育学および心理学の諸演習科目、野外活動の指導力を養成する「野外体験実習」(2単位)、学校カウンセリングの基礎力を養成する「学校カウンセリング演習」(2単位)などを履修していく。

そして、3年次後期からの「学校臨床学特殊研究Ⅰ」「学校臨床学特殊研究Ⅱ」「学校臨床学特殊研究Ⅲ」(各2単位)によって卒業論文指導を受け、「卒業論文」(4単位)を作成しなければならない。

3) 人間文化学科の専門教育科目

(1) 1年次においては、学科専門教育の基礎となる「人間文化論」(2単位)のほか、「入門演習Ⅰ」(1単位)「入門演習Ⅱ」(1単位)の3科目(4単位)を必修とし、さらに学生がコースを選択する際の手がかりを与えるために、各コースから入門的な科目を1科目ずつ、合計6科目を配置し、そのうち3科目(6単位)を選択必修とする。なお、「入門演習Ⅰ」「入門演習Ⅱ」は、現在の学生に著しく不足している読書力と作文力を補い、同時に学生の修学上の相談に応えるために開設されたものである。

(2) 1年次における基礎科目によってコースの凡そのイメージを把握した学生は、2年次に志望するコースを選択し、 Semester毎に配列された授業科目を履修することによって、それぞれの専門教育に取り組む。また、各コースは基幹的な授業科目を必修としている。

(3) 各コースとも、少人数の学生を対象に講読・演習・実習によって基礎的な思考能力を徹底的に鍛錬し、相当程度の専門的・実践的・応用的能力の開発を目指す。

(4) 4年次には、各コースともに「卒業研究Ⅰ」「卒業研究Ⅱ」(各2単位)によって卒業論文指導を受け、「卒業論文」(4単位)を作成しなければならない。

8. 学生確保の見通し

1) 大学入学者等の動向

(1) 高等学校からの大学進学者

鹿児島県内の高等学校卒業生の大学等進学率は、18歳人口が減少に転じているとはいえ、平成13(2001)年度学校基本調査【資料1】によれば、37.3%(男子33.1%、女子41.5%)と、前年に比べて1ポイント上昇している。また、鹿児島県内の高等学校卒業生が県外の大学等に進学する割合は、54.5%(平成12(2000)年4月入学者の場合)となっており、ほぼ全国平均となっている。また、本学部の入学者のうち鹿児島県内の高等学校卒業生が占める割合は、以前(平成10(1998)年度は62.5%)に比べて高い割合を占めており、平成13年度では74.5%である。**鹿児島県は県民所得が全国で最下位に近く、遠隔地の大学に通学する経済的な余裕があまりない学生もおり、県内の大学の充実が重要であると考える。本来、本県は歴史的に教育熱心な土地柄であり、経済状況の改善と受験生が希望する学部・学科の設置によって、入学者の増加が期待される。**

(2) 編入学

本学部では、毎年10人程度の編入学生を受け入れており、今後も安定した受け入れが可能であると思われる。ここ数年の傾向として、人間関係学科への受け入れが増加している(後述、18ページ)。

平成13年度学校基本調査(前掲)によれば、女子の大学等進学率は41.5%と高い数字を示している。これは、短期大学に進学する割合が高いためである。本学は、学園が設置する鹿児島女子短期大学から毎年編入学生を受け入れており、今後も大学の課程をさらに修めようという意欲を持った学生の潜在的な需要があるといえる。同短期大学との間には単位互換制度を設けており、平成14(2002)年度から始まる県内大学授業交流においては、他短期大学との間にも単位互換制度が実現することから、編入学を希望する学生の数が減少することはないと思われる。

(3) 社会人

本学では、生涯学習センターを設置し、公開講座、地元自治体との連携講座、エクステンション・スクール(サテライト・イブニング・スクール)を開設するなど、社会人の受け入れに積極的である。毎年若干名の社会人学生が入学しているが、科目等履修生や聴講生として学ぶ学生の需要もある。

(4) 留学生

正規の留学生は、このところ高い増加傾向を示している。平成13(2001)年度には大学全体で5人であったが、平成14(2002)年度は50人である。

2) 入学試験

本学部では、一般入試以外に推薦入試、AO入試など、多様な入学試験の方法を取り入

れているが、平成 15（2003）年度にはセンター入試を導入する。これにより、今まで以上に鹿児島県外からの入学者が期待できる。

3) 臨床心理職に対する社会のニーズの高さと教育機関の少なさ

(1) 心理学、特に臨床心理学の専門知識を持つ人材が求められる場が広がっているが、本県の場合、人材の需要と供給のアンバランスが著しい。例えば、本県の臨床心理士は 42 人（平成 14（2002）年 4 月）であり、人口比で考えても、全国平均と比べても著しく低い。そのため、スクールカウンセラーの配置もなかなか進まない状況がある。また、福祉、保健関連の機関への心理職の配置も進んでいない。従って、本学が**心理臨床学科**として、定員を拡大し、充実した教育内容によって、社会の求める人材を養成することは重要なことと考える。

(2) 近年、人間関係学科への社会人入学や編・転入が増加しており、最も多いのは短期大学、福祉系専門学校からの編入である。本県は、従来、女子の短期大学志向が強かったが、女子の高学歴志向は今後ますます強くなると思われる。また、生涯学習の時代ということから考えると、社会人が入学しやすい状況を作ることによって、今後社会人の潜在的な入学希望者の掘り起こしが可能だと考える。

(3) 一方、心理学関連の県内の高等教育機関は本学を除くと、教育学部や福祉系学部のなかにあり、受け入れ枠も小さい。定員 120 人の**心理臨床学科**は、社会のニーズに応えることができる。

4) スペシャリストかつゼネラリストを養成する学科の必要性

(1) 今回申請する人間文化学科のように、言語、社会、歴史、文化、環境を学際的に学ぶことができ、かつ、多様なニーズに応えられる学科は、全国的にはまだ多くない。

(2) 日本語教員養成副専攻課程を**日本語教育コース**に変更したことにより、この分野を専門的に学ぶことを希望する学生を確保できる。また、教職課程に関しては、旧来と同じ教科の免許を申請する予定であり、引き続き教職を志望する学生の期待に応えることができる。

(3) 前述のとおり、本学を志望する留学生の急増という背景があり、人間文化学科は、日本の言語、文化、社会を多面的かつ総合的に学ぶ意欲を持った留学生を多く確保できる可能性がある。

9. 卒業後の進路、就職の見通し

1) 就職の現状と見通し

最近の日本経済の急激な落ち込みに伴い、失業率の数字が示すように雇用の状況は全国的に厳しく、九州地区も例外ではない。そのような中で四年制大学新卒者の就職も苦戦を

強いられているが、本学への求人件数を見てみると、平成 11（1999）年度 260 社、平成 12（2000）年度 300 社、平成 13（2001）年度 413 社と、必ずしも求人件数が減っているわけではない。これには本学が平成 11（1999）年度の法学部設置と共に男女共学として生まれ変わったこと、このことを契機に広報活動が活発になされ知名度が高まったこと、就職指導体制の強化があげられている。この結果、【資料 2】の如く本学の就職希望者の就職率は上がってきており、平成 13（2001）年度は 94.2%の内定を受けている。この数字は文部科学省が毎年行っている就職内定調査の九州地区大学の内定率を上回った数字である。本学としてはこの状況を維持していくことが求められており、見通しは明るいといえよう。

2) 進学

近年、人文・社会科学分野においても大学院進学者の割合が非常に増えてきており、社会も大学院修了者を積極的に受け入れようとする傾向がある。本学卒業生についても【資料 3】のように大学院進学は重要な進路の一つといえよう。臨床心理士資格に関係する大学院進学については後述（16 ページ）するが、両学科の多様なコースはそれ以外にも学生の希望にあわせた幅広い学問分野の大学院への進学を可能にするものと思われる。

3) 県内及び大学所在地の状況

鹿児島県では平成 14（2002）年 3 月に東九州自動車道の末吉財部一国分間（22.5 km）が開通し、大隅地域の浮揚に期待が高まる一方、九州新幹線鹿児島ルートの中代一西鹿児島間も平成 16（2004）年度には開業の見込みで交通網の整備が相次いで進んでいる。これは県内の各種流通を促し、経済の活性化をもたらすものと期待される。

大学の所在地である始良地区には鹿児島国際空港があるという地の利を生かして、京セラ、ソニー、ファナックなどのハイテク先端企業が進出している。一方では鹿児島市のベッドタウンとして依然人口増加を続けている自治体もあり、都市化していく様相を見せている。更に隼人町を含んだ 1 市 3 町には合併都市構想も生まれている。これらは始良地区の今後の発展を予想させる要因であり、**将来的には鹿児島市に次ぐ県の中心的地域になる可能性を示すものである。**

以上のことは、とりもなおさず県内及び始良地区での求人が見込まれるということであり、新卒者の就職の受け皿も十分に用意されているとみてよい。

4) 学生の地元志向と企業の県内出身者採用

本学学生の出身地を見ると、【資料 4】のように県内出身者が 76%と大多数を占めており、次いで隣接する宮崎が 7%、熊本が 5%という状況である。一方で学生の就職地を見ると、【資料 5】のように自分の出身地及び大学所在地への就職という傾向が年々強まっていることがわかる。すなわち県内での就職希望・地元志向ということである。

これに対して学生を採用する企業の大半は、本県の場合地元企業であり、これらは概し

て小規模のものが多く、そのような企業では県内出身者を採用するという傾向が特に強く、ここに学生側の地元志向と企業側の採用傾向の合致を見ることができる。

5) 求められるスペシャリストかつゼネラリスト

今日の複雑化した社会では、自らの専門に精通したスペシャリストと同時に、幅広い教養にもとづいた柔軟な思考のできるゼネラリストが求められていると言えよう。**人間関係学部**の**心理臨床学科**と**人間文化学科**はこうした現代社会の要請に対応した人材の育成を目指しており、就職の確保は可能と見込まれる。

(1) 心理臨床学科

現在、心理学の世界では非常に多くの資格がつけられている。これはそれだけ社会のさまざまなところで「心のスペシャリスト」が求められているという証拠であろう。本学においても従来から福祉や医療の分野における心理職への就職は【資料6】のように少なくなく、その需要は今後ますます増えていくことが予想される。この他にも、教育・保育・司法・労務などの分野で心理学の素養を持った人材が求められており、本学科の学生の就職分野は拡大される傾向にあるといつてよいだろう。

また、今日心理学の専門性を活かした仕事としてスクールカウンセラーがある。文部科学省は全中学校にスクールカウンセラーを配置しようとする方針を打ち出しているが、鹿児島県では未だ十分な体制が整っていない。その大きな理由の一つはスクールカウンセラーの条件とされる「臨床心理士」有資格者が鹿児島県に非常に少ないことにある。その数は平成14(2002)年4月現在42人である。臨床心理士の資格を取るためにはまず大学院を修了することが条件だが、本学には大学院がないため臨床心理士を養成することはできない。しかしながら社会の強い要請により全国で臨床心理士養成の大学院は年々増えてきており、平成13(2001)年3月現在55校である。それらへの進学は本学卒業生の重要な進路の一つとなっている。大学院進学は決して容易なことではないが、本学では従来より志望者が多く、心理系大学院への進学実績も【資料3】のように着実に残してきている。新設学科においても大学院進学希望者に対して更に充実したサポートをしていく予定である。

(2) 人間文化学科

教員や公務員は従来より学生の就職希望先として根強い人気があるが、採用枠が狭められており、中心は一般企業等への就職である。従って、国文学、英語・英文学等の限定された伝統的な学問体系による専門知識ではなく、幅広い知識を身につけ、国際化・情報化に対応出来るコミュニケーション能力の高い学生が求められている。新学科は国文学、英語・英米文化の他に社会学や生涯教育、歴史・地理、日本語教育の分野を含み、それらを広く学んだ学生はゼネラリストとして多くの職業に対応できるであろう。また、日本語教員は国際交流の観点からスペシャリストとしての需要が見込まれる。本学科の6つのコースは職業選択の幅を拡げ得るという点で就職に際し有利に働くものと思われる。

10. 海外語学研修の具体的計画

英語圏において1か月間のホームステイによる語学研修を行い、訪問国の歴史的・文化的背景を直接体験することにより、自己の成長を図ると共に、諸外国との相互理解と友好を深め、広く社会に貢献できる人材を育成する事を目的とする。

本学の海外語学研修は、すでに平成元年度からの実績があり、英国ロンドン市内の2校（ハムステッド・スクール・オブ・イングリッシュ及びセント・ジャイルズ・カレッジ・ハイゲイト校、いずれもブリティッシュカウンシル公認）を確保している。ホームステイ先は英国人家庭であり、両校が手配する。他の学生がホームステイしている場合においても、国籍が異なるよう配慮する。

研修内容は次のとおりである。

- 1) 出発前のオリエンテーション及び事前講義。
- 2) 週15時間（合計60時間）の英語及び英国文化に関する授業。
少人数のマルチナショナルクラスで行われる。
- 3) 週1回の週末研修旅行。
- 4) 事後レポート。
- 5) 自由時間の活動については、本学教員、語学学校教職員、旅行会社現地係員が指導する。

なお、事前講義と研修を修了した学生には4単位を授与する。

11. 社会人・留学生・帰国子女の受け入れ及び編入学定員

本学部では、社会人・留学生・帰国子女のための特別入学試験は実施するが、定員枠は設けない。しかしながら、高等教育の門戸を開放し、また生涯学習に対する社会的関心の高まりに応じる意味で、以下にあげる点を考慮しながら、積極的に受け入れる方針である。

- 1) 社会人・留学生・帰国子女の受け入れを容易にするため、 Semester制を導入している。
- 2) 社会人を受け入れる際には、入学金等の減免を行い、学生の経済的負担を軽減している。
- 3) 留学生等については、本学が設置する国際交流委員会・関連委員会、及び外国人留学生交流支援の会等と連携をとりながら積極的に対応する。正規カリキュラムの中に外国人留学生特別科目等を設置して、当該学生の速やかな適応を図るべく対処している。また留学生等がなんらかの事由で履修が困難となり、更なる代替的な特別カリキュラム

を設定した方が、より高い学習効果が望まれると判断する場合は、然るべく準備を行う。

編入学については、編入学のための特別な定員枠は設けない。しかしながら編入学を希望する申し出があれば、学則に従い、編入学試験を実施する。